

紀伊水道域におけるスズキの漁獲実態*

堀木信男

はしがき

ついて取りまとめたものである。

スズキは沿岸性魚類のなかでも比較的経済価値が高く、かつ、成長が早いため、近年栽培漁業あるいは資源管理型漁業の対象魚種として注目されている。

本県の紀伊水道域では小型底びき網、一本釣、刺網および定置網などで漁獲され、重要魚種の一つにあげられている。本種は特に、冬季に紀伊水道中・北部域で操業する雑賀崎漁協の小型底びき網、また、夏季に友ヶ島周辺海域を漁場とする加太漁協の一本釣により多獲されている。加太漁協における一本釣では、本種はマダイに次ぐ重要魚種となっている¹⁾。

著者は、紀伊水道およびその周辺海域におけるスズキ卵の分布生態について取りまとめ、卵の出現盛期は12-1月の比較的短期間であり、その濃密分布域は紀伊水道北部域の外海系水と瀬戸内海系水との接触域（フロント）のやや内海系水側に出現することを明らかにした^{2, 3)}。

本報告は、紀伊水道域におけるスズキの漁獲実態に

方 法

この報告で取り扱うスズキの漁獲量については「和歌山県農林水産統計年報」（近畿農政局和歌山統計情報事務所）、「和歌山県漁業地区別統計表」（和歌山県）および加太、雑賀崎漁業協同組合資料を用いた。

更に、標本漁船調査資料については加太漁協所属の一本釣漁船（1991年4月から1995年12月の間）と雑賀崎漁協所属の小型底びき網漁船（1995年4月から1998年12月の間）による漁獲日報調査資料を用いた。

結果および考察

1 スズキ漁獲量の推移

瀬戸内海東部海域ならびに和歌山県（紀伊水道域）におけるスズキ漁獲量の推移を図1、図2に示した。

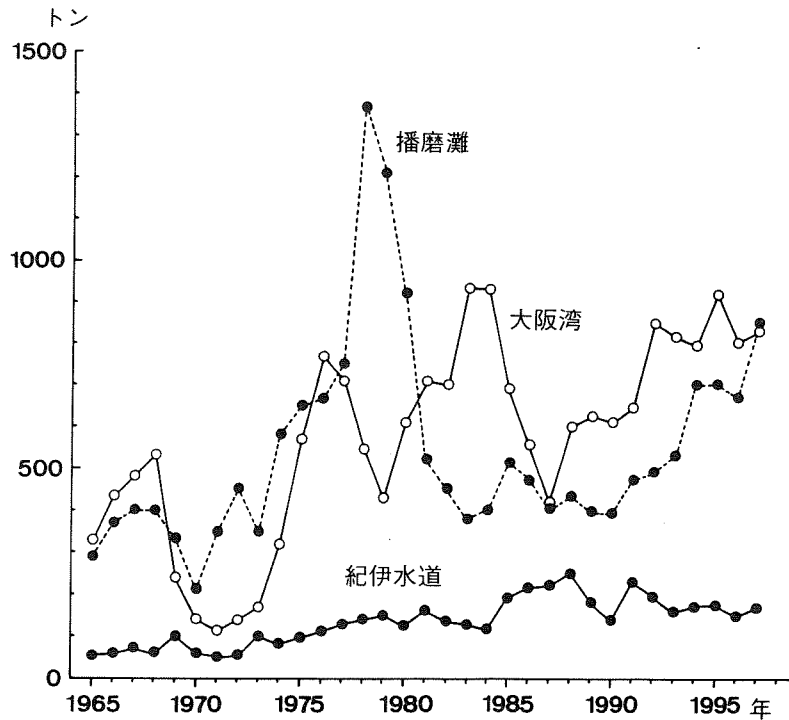


図1 瀬戸内海東部海域におけるスズキ漁獲量の推移

* 水産業振興費による。

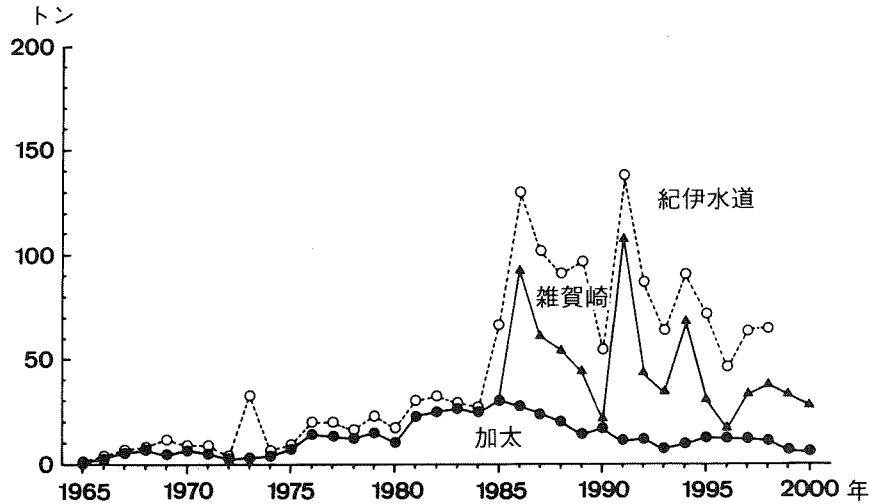


図2 和歌山県（紀伊水道域）におけるスズキ漁獲量の推移

瀬戸内海東部海域全体のスズキ漁獲量は、1974年までは1,000トン未満であったが、1975年以降は1,000トン以上の漁獲量となっている。そして、近年の漁獲量は1,500トン以上であり、比較的高い水準で推移している。

瀬戸内海東部海域の中では、大阪湾の漁獲量が最も多くて全体の約半分の52%を占めている。次いで、播磨灘が全体の35%を占め、紀伊水道は最も少なく、わずかに全体の13%である。漁獲量のピークは、大阪湾では1981-1985年と1992年以降にみられ、播磨灘では1977-1980年と1994年以降にみられる。また、瀬戸内海水産開発協議会⁴⁾によると、瀬戸内海全体のスズキ漁獲量は、近年はわずかながら増加傾向にあると報告している。

次に、和歌山県（紀伊水道域）におけるスズキ漁獲量は、1984年までは35トン未満の非常に低い水準で推移していたが、1985年に急増して1986年には130トンとなった。そして、その後減少傾向にあったが、1991年には再び急増して139トンという最高の漁獲量を記録した。しかしながら、その後は再び減少傾向にある。この1985年以降の漁獲量の急増は雑賀崎漁協の小型底びき網の漁獲によるところが大きい。ただし、1984年以前の統計資料では、雑賀崎漁協におけるスズキの漁獲量は「その他の魚類」の漁獲量の中に含まれていたため、1984年以前は紀伊水道におけるスズキ漁獲量の推移をあらわしているとは言えない。

スズキは、雑賀崎漁協では小型底びき網によって、また、加太漁協では一本釣によって、そのほとんどが漁獲されている。雑賀崎漁協におけるスズキの漁獲量は1985年以降17-108トン（平均約50トン）の範囲内

にあり、紀伊水道全体の約55%を占め、雑賀崎漁協の漁獲量変動が紀伊水道全体の推移に大きく関与している。また、加太漁協におけるスズキの漁獲量は、1965年以降順次増加傾向にあって、1985年には30トンという最高の漁獲量を記録したが、その後はやや減少傾向にある。

2 スズキ漁獲量の季節変化

近年における加太ならびに雑賀崎漁協におけるスズキ漁獲量の季節変化を図3、図4に示した。

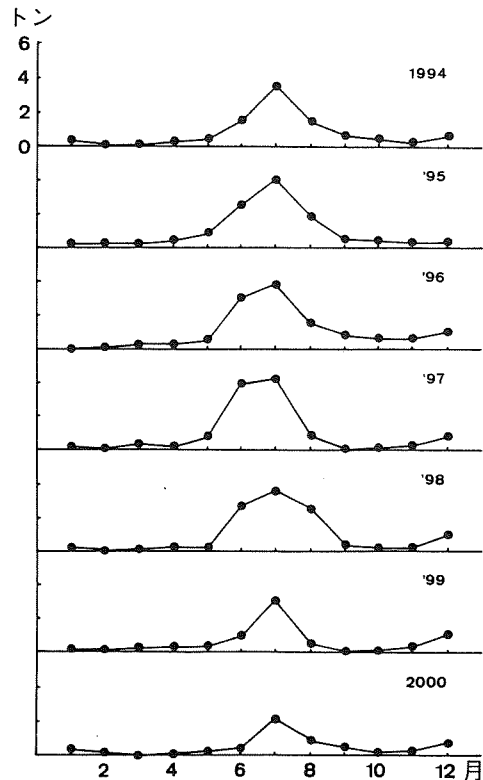


図3 加太漁協におけるスズキ漁獲量の季節変化

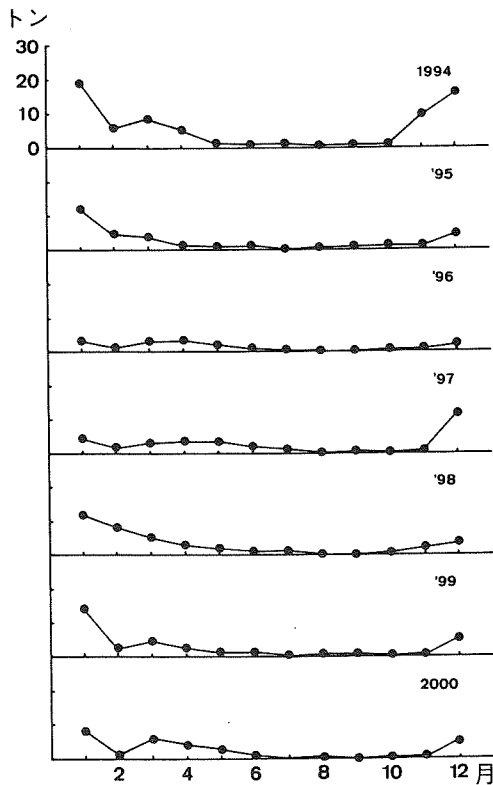


図4 雑賀崎漁協におけるスズキ漁獲量の季節変化

両漁協におけるスズキ漁獲量の季節変化は、全くその様相を異にしている。すなわち、加太漁協の一本釣による主漁期は6-8月で、この期間のみで年間の約70%近くを漁獲している。そして、12月にも若干の低いピークがみられる。この主漁期である夏季は、ちょうどスズキの旬にあたり、単価が非常に高い時期であるため、スズキを主対象とした一本釣が友ヶ島周辺海域で操業されている。

また、雑賀崎漁協の小型底びき網による主漁期は12-1月の冬季で、この期間で年間の約45%を漁獲している。そして、2月以降の漁獲量は徐々に減少している。

3 スズキ単価の推移

近年における加太ならびに雑賀崎市場におけるスズキ単価(円/kg)の季節変化を図5、図6に示した。

本種の単価は季節変動が極めて大きく、本県ではこのような魚種は他にあまり類をみない。中でも一本釣で漁獲され、かつ、活魚で入札される加太市場では、最も高い平均単価の月(1994年8月)は最も安い平均単価の月(1999年12月)の約8.2倍の値にもなる。

一本釣により漁獲される加太市場では、スズキの単価が最も高い月は本種の旬にあたる7月と8月にみられ、これらの月を含む6-9月が単価の高い時期であ

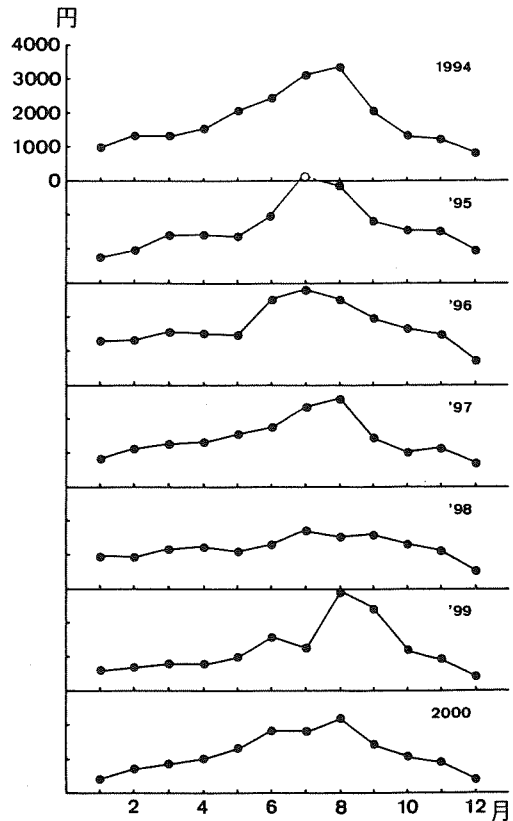


図5 加太市場におけるスズキ単価の季節変化

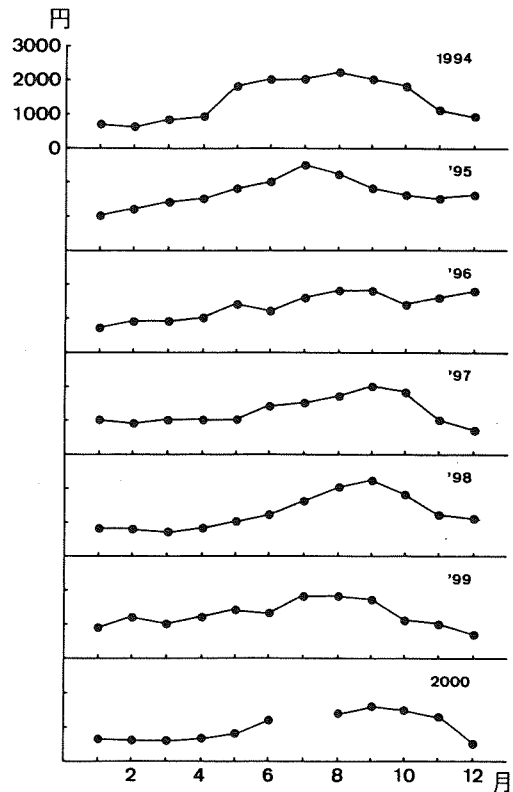


図6 雑賀崎市場におけるスズキ単価の季節変化

る。1994年7月、8月や1995年7月などは3,000円/kgを超えており、また、近年の魚価安の中でも、この時期のものは、ほぼ2,000円台を維持している。そし

表1 一本釣標本漁船によるスズキ漁獲量 (加太漁協)

上段：尾数
下段：重量 (kg)

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計
1991	—	—	—	0	12	105	41	54	18	6	5	31	272
	—	—	—	0	14.0	111.3	71.2	65.0	17.4	13.0	9.0	57.0	357.9
1992	6	5	23	0	4	19	5	23	64	28	3	2	182
	6.5	5.0	25.7	0	11.0	36.3	7.0	29.3	77.1	41.0	4.0	5.0	247.9
1993	0	4	0	2	16	27	23	11	17	3	33	3	139
	0	3.8	0	2.3	18.2	41.2	38.0	19.5	23.3	4.0	48.5	5.0	203.8
1994	1	0	2	10	8	19	57	52	5	6	5	2	167
	1.0	0	2.5	5.8	10.2	23.0	82.5	63.4	8.0	7.0	8.0	4.0	215.4
1995	0	0	6	5	22	62	55	18	28	18	8	2	224
	0	0	3.8	7.5	25.5	89.0	80.9	28.3	37.0	40.0	13.0	5.5	330.5
合計	7	9	31	17	62	232	181	158	132	61	54	40	984
	7.5	8.8	32.0	15.6	78.9	300.8	279.6	205.5	162.8	105.0	82.5	76.5	1,355.5

て、逆に冬季の12-1月が単価の最も安い時期であり、1999年12月と2000年1月、12月は、わずかに400円台である。

小型底びき網により漁獲される雑賀崎市場では、スズキ単価の季節変動は加太市場ほど大きくなく、600円から2,500円の範囲内にある。その中でも6-9月の夏・秋季が高く、12-4月の冬・春季が安い。

4 標本漁船による漁獲実態

加太漁協所属の一本釣漁船および雑賀崎漁協所属の小型底びき網漁船による漁獲日報調査の取りまとめを行った。

1) 加太漁協所属の一本釣漁船

一本釣標本漁船によるスズキ漁獲量の推移を表1、スズキの体重組成の経年変化を図7、スズキの漁場を図8に示した。

スズキ漁獲量の季節変化は、加太漁協全体のそれとよく似ており、6月が漁獲尾数、漁獲重量ともに最も多い。次いで、7月と8月であり、この6月から8月の間で年間の約58%を漁獲している。

また、一本釣では0.4kgから5.0kgのものが釣獲され、その中でも0.6-1.0kgのものが最も多く、次いで、多いのは1.1-1.5kgと1.6-2.0kgのものである。これらの漁獲物は林・清野⁵⁾、(財)海洋生物環境研究所⁶⁾によると、3歳魚を主体に2-4歳魚にあたと推定される。

友ヶ島周辺海域における一本釣りの主漁期である6-8月の漁場は、地ノ島と沖ノ島間の海峡域(通称中ノ瀬戸と呼ばれている。)に集中している。林・清野⁷⁾、日

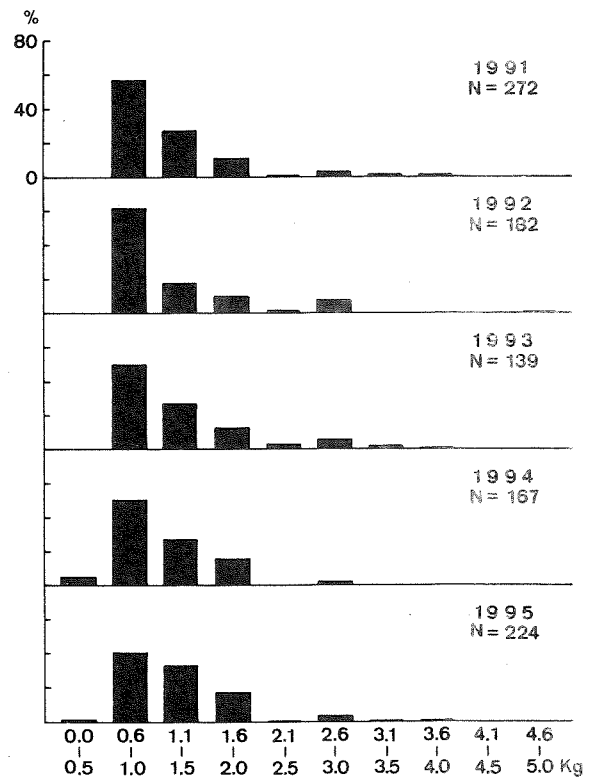


図7 一本釣標本漁船によるスズキの体重組成の経年変化 (加太漁協)

本水産資源保護協会⁸⁾によると、本種は春・夏季には、索餌のため沿岸の浅所(磯場)へ来遊すると報告しており、このこととも一致する。また、冬季の漁場は釣獲例が少ないが、夏季の主漁場とほとんど変わらない海域で釣獲されている。

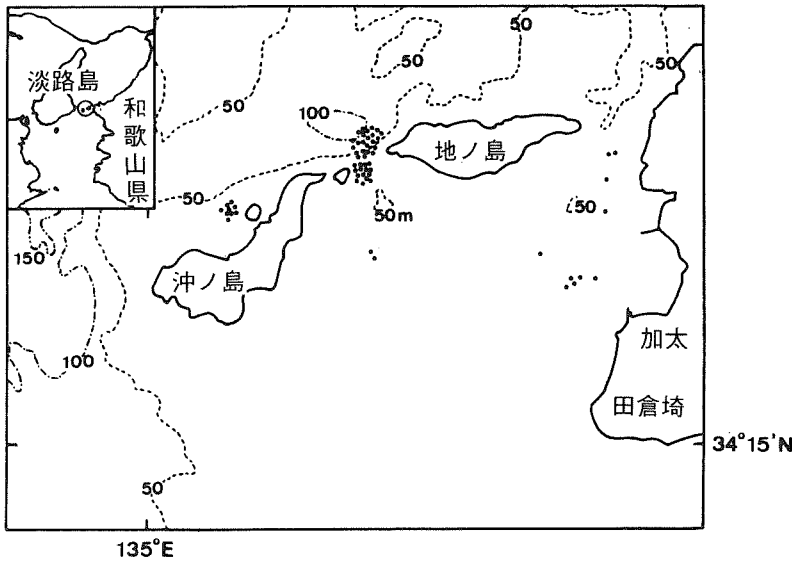


図8-1 一本釣標本漁船によるスズキの漁場（6-8月）
・スズキを漁獲した場所

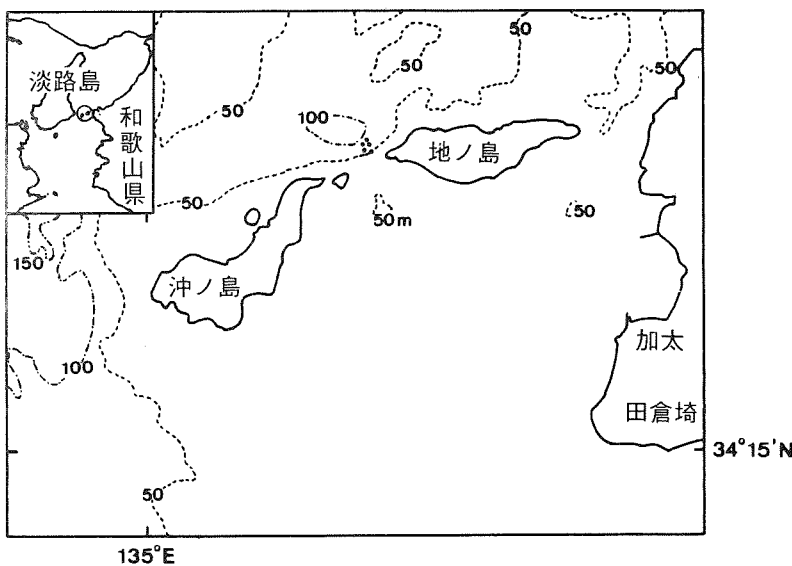


図8-2 一本釣標本漁船によるスズキの漁場（12-1月）

2) 雑賀崎漁協所属の小型底びき網漁船

小型底びき網標本漁船による漁獲日報調査資料より、スズキ漁獲量の推移を表2、スズキの漁場を図9に示した。

標本漁船によるスズキの漁獲は、11月から翌年4月の間にみられ、5月から10月の間は全く漁獲されていない。そして、漁獲の盛期は12-1月の比較的短期間のみみられ、この2カ月間の漁獲のみで年間の90%以上が漁獲されている。

スズキの漁獲盛期である12-1月の漁場は、農林漁区番号が120、127、128、129および136のわずかに5漁区のみである。このうち和歌浦湾沖の漁区120でス

ズキ全漁獲量の約67%を漁獲して最も多く、次いで、湯浅湾沖の漁区128が多く、この両漁区での漁獲量は全体の約96%を占めている。また、月別にみると、12月は漁獲量のほとんどの90%以上が漁区120で集中的に漁獲されている。そして、1月は漁区120での漁獲（全体の約37%）よりも漁区128での漁獲の方が全体の約56%と多くなり、この両漁区での漁獲量は全体の約93%を占めている。これらのことは12月から翌年の1月にかけて、本種が紀伊水道の深場へ徐々に南下することを示唆しているものと推察される。

この12-1月に著者が雑賀崎漁協市場において、小型底びき網で漁獲されるスズキを観察したところ、漁獲される魚体は0.5kgから5.0kgの範囲内にあり、中でも1.5-2.5kgのものが最も多かった。これら漁獲物の魚体は、加太漁協の一本釣による漁獲物よりも大型群であり、3-5歳魚と推定される⁶⁾。更に、これらの漁獲物は漁業者や市場関係者によって、雌雄共に成熟している個体が多いことが確認されている。

このような冬季におけるスズキの漁場は、著者^{2,3)}が報告したスズキ卵の濃密分布域とよく一致している。本種が越冬ならびに産卵のために大阪湾あるいは播磨灘から紀伊水道の深所へ南下して、紀伊水道中・北部域で集群したものを小型底びき網によって大量に漁獲しているものと考えられる。

以上のように、スズキは単価が非常に高い夏季に漁獲が比較的少なく、逆に、単価が最も安い冬季に小型底びき網で大量に漁獲されている。今後、このようなスズキ資源の利用実態の改善を図る必要がある。

表2 小型底びき網標本漁船によるスズキ漁獲量 (雑賀崎漁協)

上段：重量 (kg)
下段：出漁日数 (漁獲日数)

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計
1995	-	-	-	5.4 10(1)	0 10	0 12	0 9	0 9	0 12	0 14	0 8	99.3 13(10)	104.7 97(11)
1996	43.5 10(6)	1.2 5(1)	0 10	0 12	0 7	0 7	0 11	0 5	0 8	0 13	0 9	9.1 12(4)	53.8 109(11)
1997	26.8 9(6)	0 5	2.3 10(2)	7.0 9(4)	0 10	0 9	0 8	0 5	0 8	0 11	1.7 10(1)	40.5 11(7)	78.3 105(20)
1998	34.6 8(6)	2.2 6(2)	0 15	1.1 14(1)	0 8	0 9	0 12	0 7	0 6	0 7	0 14	0 11	37.9 117(9)
合計	104.9 27(18)	3.4 16(3)	2.3 35(2)	13.5 45(6)	0 35	0 37	0 40	0 26	0 34	0 45	1.7 41(1)	148.9 47(21)	274.7 428(51)

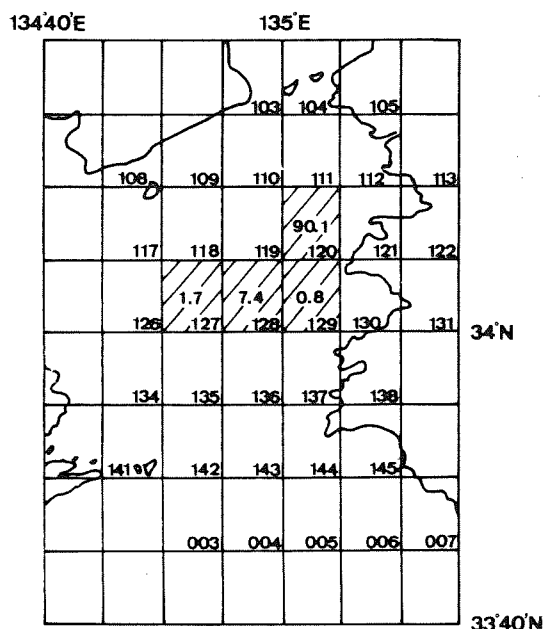


図9-1 小型底びき網標本漁船によるスズキの漁場 (12月、数字は全漁獲量に対する漁区漁獲量の比率)

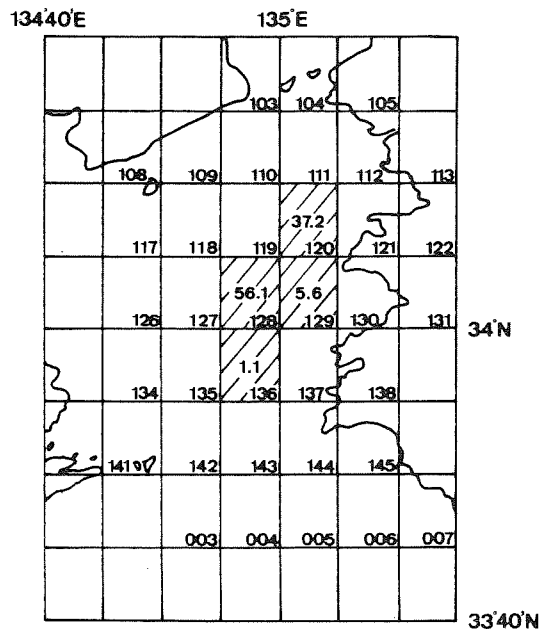


図9-2 小型底びき網標本漁船によるスズキの漁場 (1月)

要 約

- 1 瀬戸内海東部域におけるスズキ漁獲量は、1981年以降では総計で1,000-1,800トンの範囲内にあり、近年は比較的高い水準で推移している。灘別にみると、大阪湾が最も多く、次いで播磨灘であり、紀伊水道では最も少ない。また、和歌山県(紀伊水道域)では、1991年には139トンという最高の漁獲量を記録したが、その後はやや減少傾向にある。
- 2 スズキは雑賀崎漁協では主として小型底びき網によって漁獲されており、その漁獲量は紀伊水道全体の約55%を占めている。また、加太漁協では主とし

- て一本釣によって漁獲されており、1965年以降順次増加傾向にあつて、1985年には30トンという最高の漁獲量を記録したが、その後はやや減少傾向にある。
- 3 スズキ漁獲量の季節変化は、加太と雑賀崎の両漁協では全く様相を異にしている。すなわち、加太漁協の一本釣では6-8月の夏季、雑賀崎漁協の小型底びき網では12-1月の冬季に漁獲のピークがみられる。
- 4 スズキの単価は季節変動が非常に大きい。特に一本釣で釣獲され、かつ、活魚で入札される加太市場ではこの傾向が著しい。季節的にみると、単価が最も高い時期は本種の旬にあたる夏季の7月と8月に

- みられ、また、逆に冬季の12月と1月が最も安い。
- 5 友ヶ島周辺海域で一本釣により多獲される6-8月は、本種が沿岸の浅所（磯場）に来遊する時期である。これらの魚体は0.6-1.0kgのものが最も多く、3歳魚を主体に2-4歳魚と推定される。
 - 6 また、紀伊水道中・北部域で小型底びき網により多獲される12-1月は、本種が越冬ならびに産卵のために南下、集群する時期である。これらの魚体は主として1.5-2.5kgのもので、3-5歳魚の産卵群と推定される。

- 7) 林 文三・清野精次、1977：若狭湾西部海域におけるスズキの生態-I、久美浜湾における季節的移動。京都府立海洋センター研究報告、第1号、29-43.
- 8) 日本水産資源保護協会、1981：I. 魚類、36.スズキ、水生生物生態資料、148-152.

謝 辞

標本漁船調査にご協力をいただいた加太漁業協同組合所属の一本釣漁業の由井 臣氏、雑賀崎漁業協同組合所属の小型底びき網漁業の谷口照秋氏に心から厚くお礼申し上げる。

なお、雑賀崎漁協所属の小型底びき網標本漁船調査資料については、和歌山県農林水産総合技術センター水産試験場資源部が実施したものであり、貴重な資料を快くみせていただいた主任研究員吉村晃一氏に深く感謝する。

文 献

- 1) 堀木信男、1989：友ヶ島周辺における一本釣の漁業実態、一主としてマダイの漁獲状況一、和歌山水試報告、昭和62年度、108-123.
- 2) 堀木信男、1976：紀伊水道およびその周辺海域におけるスズキ卵の分布生態について、栽培技研、5(2)、1-9.
- 3) 堀木信男、1993：冬季の紀伊水道およびその周辺海域におけるスズキ卵、アイナメ稚仔の分布と水塊との係わり、日水誌、59(2)、201-207.
- 4) 瀬戸内海水産開発協議会、1995：すずき、図説 瀬戸内海における魚種別漁場別漁獲量の経年変化、1975年～1993年（昭和50年～平成5年）、61-62.
- 5) 林 文三・清野精次、1978：若狭湾西部海域におけるスズキの生態-II、スズキ当歳魚の食性と成長、京都府立海洋センター研究報告、第2号、109-116.
- 6) (財) 海洋生物環境研究所、1991：(13) スズキ、沿岸至近域における海生生物の生態知見、魚類・イカタコ類編、259-279.